

良き先輩と後輩に導かれ支えられて

田中 靖久（一九七九年卒、一九七九年入会）

思い掛けない二つの栄誉に、恐縮しつつ感激しています。当然ながら自らのみの成果ではなく、これまで指導を頂いた先輩諸氏の皆様に深く感謝申し上げます（写真）。

師匠の国分正一先生から、私に目を留めて頂いたきっかけを伺い、いささか驚いたのはつい最近のことです。その「後頸部痛に対する頸椎椎間関節ブロック」（東北整災誌, 30, 1986）は、Bogdukらの有名な椎間関節性頸部痛の論文の二年前に掲載されました。この研究を提案

して下さったのは佐藤光三先生と存じます。透視下の斜位像を見ながらブロックする方法を編み出せたのは、佐藤哲朗先生と宮城島純先生が斜めの効用をしきりに語り合っているのを耳にしていたからです。

由利組合病院の青柳耐佐先生そして公立気仙沼病院の細越悠夫先生の下で三年間の有意義な研修を経て帰局したものの、石巻赤十字といわき市立常磐病院へ立て続けに出張を命じられました。ブロックの対象例の多くは、一人科長で三カ月勤めた常磐の患者さん方でした。

初稿を作り指導を仰いだ佐藤哲朗先生には「何を伝えたいのか分からない」と諭され、一念発起して書き改めたものです。恥ずかしながら、研究手法に欠陥があることに後で気付き、自らその批判を述べています（変性頸椎由来の頸部痛―神経根性頸部痛と既成概念への疑問：整・災外, 53, 2010）。同じ致命的な欠陥が指摘できるBogdukらの論文は、いまだに堂々と欧米の教科書に引用されています。一度流布してしまうと、誤った概念でも払拭は容易ではありません。

中学三年時の春に腰椎のヘルニアを患いました。バスケットボールの試合中に発生した機転を覚えています。ライン外に出ようとするとボールを確保しようと、無理な

体勢で極端に体をねじった瞬間です。痛みなくプレーを終え、コートに座りながら他校の試合を見学後、立ち上がろうとしたら、腰が抜けたように成って、動けないのです。近くの青森労災病院に二カ月間入院しました。中々改善せず、主治医に手術を尋ねたら、成功率は五分五分、そして開腹手術と教えられました。子供ながらに、これは危ないと考えたものです。

その後も痛みがとれず、福島県の石川町の接骨院で二度に亘り療養生活を送りました。近くの民家の大広間に病める老若男女が混合で寝泊まりし、自炊して過ごす寮生活で、風呂は皆で猫啼（ねこなき）温泉まで歩きました。高校受験は石川町からとんぼ返りとなりました。当時、夏休みだったか福島医大の複数の学生が白衣姿で勉強にいられていました。そのうちの一人が、接骨院長の息子さんの（故）菊池臣一福島医大長でした。菊池先生に依頼された「頸部神経根症と頸部脊髄症の症候による診断」(NEW MOOK 整外 1999 No.6 頸椎症 金原出版)は今なお、頸椎性脊髄症診療ガイドラインの推奨論文に挙げられています。

国分先生に与えられたテーマが頸部の神経根症でした。浅学非才の身ながら、ここまで歩めたのは偏に師匠



日整会功労賞の授賞式後、国分正一先生と
(二〇二二年五月十八日神戸)

の長年に亘る薫陶のおかげです。椎間関節ブロックが端緒となった頸部痛の研究は、神経根症を学ぶことで、「Cervical roots as origin of pain in the neck or scapular regions」(Spine, 31, 2006) にたどり着きました。北米脊椎学会 (NASS) の頸部神経根症ガイドラインの診断の項目において、唯一 Level 1 のエビデンスがある論文と評価されています。

日整会功労賞は相澤俊峰先生の御尽力のおかげであり、脊椎脊髄病学会名誉会員は、和歌山医大教授の山田

宏先生の御推挙によるもので、両先生に心底より感謝申し上げます。字数が尽きて具体的に述べられないものの、そのほかにも数多くの敬愛する諸先輩方と、優秀な後輩諸氏に支えられたことに低頭して御礼を申し上げます。